

入選

本当のやさしさ

岡山県 児島中学校

3年 八松龍弥

僕は、そのとき絶望した。中学2年生の僕は、職場体験学習から家に帰る途中だった。川の上を通りかかったとき、段差につまずき自転車の車体がガクンと揺れた。そのはずみに、前かごに入れていたナップザックの口から、筆箱が飛び出した。

筆箱は地面で弾み、3メートルはある川に落ちてしまった。その筆箱は、数日前に買ってもらったばかりの新品で、先生に自慢するほど気に入っていた物だった。ポチャンと筆箱が川に落ちる音を聞き、パニックになった。せっかく買ってもらった物を、川に落としてしまった罪悪感とショックで頭が真っ白になった。

しかし、パニックになった自分とは裏腹に、どこか冷静な自分がいた。先生が「何かあれば、学校に電話をかけてきなさい。」と言っていたことを思い出し、近くにあった自動車整備工場の人に声をかけ、助けを求めた。

頭の中を整理しながら、なんとか事情を説明すると、整備工場の方は事務所に入れてくれ、快く電話を貸してくれた。僕が学校と家に電話をかけている間も、「脚立を下ろすことはできないか」「棒をつなげれば、届くのではないか」と、仕事中にも関わらず、必死になって動いてくれた。

どうやったら取れるだろうか、と頭を悩ませていると、連絡を受けた先生が駆けつけてくれた。祖父と弟も、虫取り網を持ってきてくれた。祖父と弟が持ってきてくれた網に、整備工場の方が用意してくれた棒をくくりつけ、その長くなった網を使って、先生が筆箱を取ってくれた。

僕は、先生や整備工場の人にお礼を言って家に帰った。連絡をすることはできたが、僕はそばで見ただけで、何もすることができなかった。僕以外の筆箱とは何の関係もない人たちが、一生懸命動いてくれたおかげで、大切な筆箱を取り戻すことができた。

自動車工場の人には、この後母といっしょに改めてお礼に伺った。僕がお礼を言うと、「よかったですねえ。」と、何でもないことかのように笑顔でお礼を受け入れてくれた。後日、先生にも改めてお礼を伝えると、「よかったな。」と、笑いながら言ってくれた。

僕からしたら、とても大きなできごとだった。でも、僕を助けてくれた人たちはみんな、何でもないことのように「よかったね」と笑顔であっさり終わった。「してあげた」「助けてあげた」という感じではなく、自然と誰かのために動くことができる人たちを見て、本当にすてきだなと思った。

僕は、今まで「お礼を言ってくれたらうれしいな」と思っていた。もしかしたら、「お礼を言って欲しいな」と思っていたのかもしれない。僕を助けてくれた人たちのように、僕も誰かにとってのそんな人になっていきたい、と思った。

そのときは笑顔で「よかったね。」と言いたい。